フィヒテの「人間の使命」について

雉本時哉

(一)

フィヒテはイェーナ大学在職中（一七九四―一七九九）に、自己の哲学体系である知識学についていろいろの著作をつくり、一七九八年には「神の世界支配を信ずる根拠について」という自己の宗教観に関する論文を発表したが、これが無神論であるとされ、物議をかもし、それに対して、フィヒテは一七九九年に激しい論争的二論文を発表し、いわゆる無神論論争をひき起し、遂にイェーナ大学を去らねばならぬことになった。そこで彼は同年にベルリンへ行って、一私人として諸著作をつくると共に、通俗的講演をしたりなどして暮し、一八一〇年にベルリンに大学ができるに及んでそこの教授になった。

今問題とする「人間の使命」は、彼がベルリンに出て先ず発表したものである。（一八〇〇）その序文で彼は「本書は専門的哲学者達のものではない。又彼等は本書の中に、同じ著者の他の諸著述中に述べられていないことは何一つ見出さないであろう。」と述べているように、この著作は新しいテーマに関する専門的論述と見ることはできず、今までに発表された知識学をもとにしつつ、自己の宗教観を述べ、それを通じて「人間の使命」についての見解を述べたものということができる。その主要点は、「人間の使命」を単に感性的立場即ち世俗的地上的立場からだけで考えることに満足せず、むしろ超感性的立場即ち超世俗的天上的立場から考えるべきことを強調しているところにある。彼は序文において、「読者を感性から超感性的なものへ力強く拉し去るつもりであった。」と述べている。無神論論争を経た直後における彼の神の実在性に関する考えを本書において見ることができる。

(二)

本書は、疑、知、信の三篇から成立している。人間の使命を明かにするためには、先ず人間を如何なるものと考えるかが定められねばならない。先ず宇宙万物を自然と考え、人間も亦この自然の一部にすぎぬと見る考え方が説明され吟味される。この立場を取るとき人間は自由の主体であることができなくなる。従ってこの立場を去って、人間を自由の主体であるとする立場に立とうとする。ここに「自然の体系」と「自由の体系」との対立を生ずるが、この両者のうち何れを取り、何れを捨てねばならぬかを示す確固たる根拠をつかむことができず、私は（フィヒテは本書中に示される「私」は著者自身でなく本書の読者自らがこれに成られるよう序文中で希望している。即ち他人事としてでなく、読者一人一人は本書に即しつつ自らのこととして思索を進めることを望んでいる。）心の不安動揺を抑制し得ず、疑の動揺の中に苦しまねばならぬ。この状態を脱却するため、われわれがものを知るとは如何なることかを吟味しようとする。これが第二篇の「知」である。この篇において、感覚、直観、思惟、などが精査され、結局意識は意識の外に出ることはできず、知識によって明らかにされるものは知にすぎず、この知は模写にすぎない。しかもよく調べてみるとそこに模写されている、何物かが存在するというのでもない。知によって得られるものは、意味も目的もない諸々の、像にすぎない。知識の体系は、いかなる実在性も意味も目的も有しない単なる「像の体系」である。私はこの立場に安住し得ぬことはいうまでもない。私はこの立場を去って信の立場に入らざるを得ぬ。信は如何にして得られるかということ、又信の立場に入ったとき、私は実在にふれることができ、又そこにおいてはじめて人間の使命が達成されるということ、これらのことを述べているのが第三篇の信である。

以上によって、本書の大筋が示されたと思うから、次に順序に従って、疑、知、信についての大体の内容を述べて見よう。

(三)

自然は生成するものであって、変化やむときがない。それの各瞬間の諸限定は、それらに先行する諸限定によって限定され、又これら諸限定には必ず一定の諸限定が後続して、他の諸限定は後続しない。このようにこれら諸限定の交替は厳密に法則的であって、自然はいわば諸現象の隙間のない連鎖をなしていて、その環はいずれもそれに先行する環によって限定され、又それに後続する環を限定している。自然がこのような

形で生成変化してやまない活動であり得るのは、そこにそのように活動させる力が働いているからと考えられる。力はまさにこの活動の原理といい得る。もし一切諸物を一つとして見、一つの自然と見るならば、そこに一つの力が働いていると見ることができ、又一切諸物を個々のものと見るならば、そこに多数の力が働いていると見ることができるが、いずれにしても自然は厳密な自然必然性の連鎖であるといわねばならぬ。

この連鎖の一部をなす私は、もちろん私自身によって生起したものではなく、私のそとなる或る力によって現実化したものである。私が意識を持ち思惟するのも、実は自然規定にほかならぬ。それは丁度規則的に成熟して行くことが、植物の自然規定であり、目的に合うように運動することが、動物の自然規定であるのと何等異るところはない。従って私は植物と同じく形成力の一特殊限定であり、動物と同じく特有の運動力の一特殊限定であり、なおその上に思惟力の一限定であるといわねばならぬ。そしてこれら三根本力が一つの力にまで調和的に展開合一することによって私の人類としての特質ができあがるということができる。このようにして、私はどこまでも自然によって限定された或物以外の何物でもない。このような考え方によれば、私は賢者・善人、或は愚者・邪悪人たるべく自然から決定されており、私は前者から何等の功をも、又後者から何等の罪をも受けるべきではないということになる。

以上の考え方は、一面いろいろの事柄を説明するのにはまことに好都合であって、たしかに私の悟性を満足させるものを持っているが、その反面又如何にしても私の心を満たさぬものを持っている。

私は賢者・善人、或は愚者・邪悪人たるべく決定されており、私は前者から何等の功をも、又後者から何等の罪をも受けるべきでないということ、これこそ私の心を憎みと怖れとをもって満たすものである。私は私自身が独立であり、他において又他によってでなく、私自身だけで、或物であることを欲する。又このような或物としてみずから私の諸限定の究極の根拠であることを欲する。「自然の体系」の考え方において、各根原力・自然力が占める地位を私自身が占めることを欲する。

このような願望に従って私は私に特有な力の本来の座と中心点とをどこに求めようとするか。それは私の身体ではない。身体は少くともその存在からいって、諸自然力の現れと見るべきである。又私の感性的諸傾向でもない。これらは自然諸力の私の意識への関係の姿だと思われる。従って中心点は思惟と意欲とであるというべきである。私は自由に立案された目的概念に従って自由に意欲したい。そしてこの意志は、如何なる可能的な高次な根拠によっても限定されない絶対に究極的な根拠として、先ず私の身体を、更にこれを媒介にして、私を囲む世界を動かし形

成せねばならない。私の活動的自然力はただこの主権下に服従せねばならぬ。私は次のような事態を欲する。

精神的法則に従って或る最善なものが存在せねばならぬ。私はこのものを見出すまで自由に追求し、これを見出した場合、これをこれとして認識する能力を持たねばならぬ。私はこの最善なものを、私がこれを意志するからという理由だけで意志することができねばならぬ。そしてこの意志から私の行為は結果せねばならぬ。そしてこの意志の主権の下に立つところの私の力は、まさに自然へ干渉せねばならぬ。私は自然の主でありたい。私は自由でありたい。

「自然の体系」は、自由に対する私のこの関心、およびこの体系に対する私のすべての苦情について、次のように答えるであろう。汝は汝のこころ、汝の愛、汝の関心について語ることによって、汝の自己の直接的意識の立場に立っているのだ。もし汝が自己意識というこの狭い観点から出て、汝が占めるべく期待したところの、宇宙を大観するというより高い立場に移るならば、汝が汝の愛と名づけたものが実は汝の愛ではなくて他者の愛であること、即ち——汝の裡なる根源的自然力の、自己を根源的自然力として保持するという、関心であることが——お前にわかってくるだろう。それで汝はこれ以上汝の愛を引き合いに出してはいけない。汝は汝を愛しない。決して汝はあらぬのだから。自らの保持に関心するものは汝の裡なる自然なのだ。

このような言葉に対して私は何と抗議し得るか。私は宇宙を大観するという立場に立つべきか、それとも直接的な自己意識の範囲にとどまるべきか。認識に愛が従属させられるべきか。（自然の体系）愛に認識が従属させられるべきか。（自由の体系）前者は私自身を私自身から根こそぎにして、私をいいようもない程惨めにする。後者は分別ある人々の間に不評判である。私はこの両者のうち何れを取るべきかの決定根拠を全然持たぬ。といって未決定のままでは心も落ちつかない。不確実と不決断とのこの状態から私は如何にして救われるか。

(四)

フィヒテはここで、直接的自己意識を中心として、感覚、直観、思惟などの問題を考究して、この疑の状態から脱出しようと試みる。そして、「私」と「精霊」との問答という形式を借りて、問題を展開しているが、ここでは本筋をたどり得る程度にその大要を平叙して見よう。

私は感官を通じて諸対象を知覚していると思っているが、実は感官を通じて知覚されるものは、私自身の状態であって決して対象の状態では

ない。それにもかかわらず、私はどうして真接には私自身の意識にずきないものを携えて、私自身のそとに出て、感覚されたもの、および感覚され得べきものを、実際には知覚しもしないのに、われわれが真接に知覚する感覚に附加するに到るのであろうか。ものの意識は如何なる器官によっても私に与えられることはできない。何故ならば私はそのような器官は持っていないから。それ故、ものの意識はただ私の自己意識から生み出すことができるだけである。自己意識は最初の意識であり、ものの意識は第二の意識である。前者は、生み出す、直接の意識であり、後者は生み出された、媒介された意識である。ここに、生み出すといっても、生み出さうと意識して生み出すのでなく、この生み出すという働きは、はたらきの意識を伴わぬはたらきであって、われわれがそれとして意識する精神が自由と呼ばれるのに対して、自発性といわれるものである。私は感覚によって、自分が觸発された受動の状態にあることを意識するが、この時、この受動の状態はある何物か（ある根拠）によってひき起されたものと考えざるを得ない。この様にして、ものの意識、とか対象の意識とかが生み出されるということができる。しかしこのことは、あとから事柄を反省してはじめていえることであって、直接の事実としては、觸発された受動の状態の意識と、対象の意識とは表裏一体をなしているため、対象の意識が生み出されたものであることを意識せず、いかにも、対象とかものとかが与えられてあるものとして受取られるのである。

以上の事柄をフィヒテは次の様に表現する。「私の直接的意識は、二つの成素、即ち私の受動の意識（感覚）と、根拠の原理に拠る対象の生産における能動の意識と、から合成されているが、この後者は前者に直接に結びついている。対象の意識は、対象の表象を私が生み出すことの（それとして認められない）意識にすぎぬ。その際生み出すのは私自身であるということを通じて、私はこの生産を端的に知るのである。このようにして、あらゆる意識は、一の直接的意識即ち私自身の意識にすぎない。」（57頁）又、精霊をして次の様にもいわしめる。「お前の意識はお前自身を決して超えないのだ。又お前が対象の意識だと思っている当のものは、お前がお前の思惟の内的法則に従って感覚と同時に必然的に成就するところの、対象の定立の意識にほかならないのだ」（58頁）

なるほど意識の立場から考えれば、ものの意識とか対象の意識とかはこのように考えられるであろう。しかし、ものはどこまでも、私の外にあって、私の存在一般から独立なように思われる。そして私は、この独立なものを受け入れ模写する鏡のように思われる。これらのことは如何にしても否定しがたい。どうしてこのようなことが起るか。

私の存在というのは、実はその本質は知性にある。知性の本質は自分で自分を知ることにあり、主観的なものと客観的なものとの絶対的同一性にある。ところが、意識の本質は主観と客観との分裂にある。従ってこの同一性（絶対的に一なるもの）は意識の根底であることはできても、それ自身私の意識にのぼることはできない。従って主観的意識に取っては、私自身の存在は、この主観的意識から分たれ、区別された独立した客観としてあらわれざるを得ない。ここでは主観的なものは、客観的なものをうつす鏡としてあらわれ、客観的なものは、主観的なものの前に浮ぶのである。このような状態にあっては、主観的ものは、この主観的なものの外にある存在の直接意識であるということができる。この直接意識が直観といわれるものに外ならぬ。従ってこの直観は、すべての意識がそれと共に始まり、それにおいて存立する、主観・客観の根源的分裂の表現以外の何物でもない。

私の存在の本質は知性、知性の本質は、主・客の絶対的同一性にあり、従ってこのようなものとしての知性は私に取って意識されないことは前述の通りであるが、もし知性が、このような状態の中において、ある変化的な状態から他の変化的な状態に浮動するならば、私はこの知性活動を意識することができる。そしてこの浮動は、あらゆる方向に向って線を引くような姿或はこの線の上に点を打つような姿、即ち空間としてあらわれる。かくして精霊はいう、「お前はお前のそとなる諸物の表象の真の源泉にまで貫入した。この表象は知覚ではない。お前はお前自身を知覚するだけだ。又この表象は思惟されたものでもない。諸物は単に思惟されたものとしてお前に現われるのではない。この表象は、ちょうど知覚がお前の状態の直接意識であると同じく実際に本当に、お前のそとなる或存在の絶対に直接的な意識である。（中略）現に在り、又在り得る物を、お前は直接に意識する。そしてお前が意識するところの物のほかに物は存在せぬ。お前自身がこの物なのだ。お前自身が、お前の本質の最奥の根拠、即ちお前の有限性によって、お前自身の前に立てられ、お前自身からそとの方へ投げ出されているのだ。そしてお前がお前のそとに見るすべてのものは常にお前自身なのだ。この意識は甚だ適切にも直観と名づけられた。」（64頁）

では前に述べた感覚とこの直観とは如何なる関係にあるか。感覚によって捕えられるものは、私自身の状態にすぎなかった。直観によって捕えられる、私のそとにあるものも、実は常に私自身にほかならぬとすれば、感覚と直観とは何によって区別されるのか。この区別は、私自身が如何なるものとして、そこにあるかの区別によって生ずると考えられる。私が実践的存在者としてあるとき、われわれ自身の状態を感知するのが感覚であるのに対し、私が知性としてあるとき、そこに直観が生ずるということができる。フィヒテはいう。「私は私であるから、私は端的

に私自身を意識している。しかも、或いは実践的存在者として、或は知性として、私自身を意識している。前者の意識が感覚であり、後者の意識が直観、即ち限界のない空間である。」（70頁）又他のところで、次のようにもいう。「感覚はそれ自身が一の直接的意識である。即ち私は感覚作用を感覚する。それによって私には、存在の何らかの認識は決して成立せず、ただ私自身の状態の感知が成立するだけである。しかし、私は根源的には単に感覚するだけのものではなくて、又直観するものでもある。何故ならば、私は単に実践的存在者であるばかりでなく、又知性でもあるからである。私は私の感覚作用をまた直観する。このようにして、私自身と私の本質とから、存在の認識が私に成立する。感覚は感覚され得るものへと変化する。私の觸発された状態、即ち赤、滑らかさ等は、私のそとにある赤いもの、滑らかなもの等へ変化する。こういったものと、それの感覚とを、私は空間において直観する。というのは私の直観作用自身が空間であるから。」（65～66頁）

次にものはそれぞれ空間の一定の部分を充たすものとして存在する。そしてそれらのものは、空間の同一部分に属することはできず、相互に排除しあう。それらは、互に、傍に、上にそして下に、後にそして前に、私により近く或は私からより離れてある。どうして私は、空間におけるこれら諸物の測定と秩序づけとに到達するか。感覚によってか。それは不可能、空間そのは感覚ではないのだから。それでは直観によってか。これも不可能、直観は直接的で誤りがないのに、右にいう測定、秩序づけには、見積りの誤りということがあるから。従って測定と秩序とは判断であり判定であるといわねばならぬが、その際この判定の原理となるものは、私の印象の度合である。例えば色の濃い山は近く、色の淡い山は遠いと判定するように。このようにわれわれは觸発された状態の度合を通じて、空間の諸対象の測定と秩序づけを行うわけであるが、この場合、私が一定の度合で觸発された状態にあるということは、この一定の度合で私を觸発するものが私のそとにあると考えられねばならぬ。私が一定の度合で受動の状態にあるならば、われわれのそとに一定の度合の活動がなければならぬ。私は根拠の原理によって、そのように思惟せざるを得ない。この活動はわれわれのそとにある一つの力であるが、これは決して直接的に把握されず、ただその現れによってだけ把握されるものであり、思惟されたものである。精霊はいう。「この思惟によって初めてここに、お前の感知するお前の状態とお前の直観する空間との間の連関がお前に成立する。お前は後者の中へ前者の根拠を思惟し入れるのだ」。（74頁）直観によって空間のなかに存するものが捕えられるが、根拠の原理に従う思惟、測定―秩序づける思惟は、感覚によって感知される私の觸発された状態はこのものによってひき起されたものとして、この状態を直観によって捕えられたものの性質となすに至るわけである。又このようにして、空間内において、多様な姿で存する物体界が

われわれにとって成立するのである。

フィヒテは右のように、感覚、直観、思惟について説明し、知の問題を解こうとしたが、結局は如何なるところにたどりついたか。

右に述べて来た、感覚、直観、思惟、の意味をよく考えて見ると、空間内において、多様な姿で存する物体界が成立するといっても、本来的には私は私の意識の外には一歩も踏み出ていない。私の外のものといっても、実は私自身によって定立されたものにすぎず、究極的には私自身なのだ。唯一つリアルなものとして、私だけが残るともいい得るが、その私が実は単に感覚し、直観し、思惟するもの、もっと適切にいえば、そこには感覚の意識、直観の意識、思惟の意識があるだけであり、又直接的な意識、媒介された意識があるだけで、いわばただ意識の変容があるだけで、意識というものがあるわけではない。どこにも持続的なものは存在せぬ。ただやむことのない交替があるだけである。私はいかなる存在についても全然知らぬ。私自身の存在についても知らぬ。存在というものはないのだ。知の立場に立てば、ただ表象があるだけであり、像があるだけであってどこにも、私のそとにも私のなかにも、真にリアルなものは存しない。知からは常にただ知だけが成立するにすぎない。

「自然の体系」においては、私の自由は否定された。自由を求めて、「自由の体系」を立てようとしたが、「自然の体系」と「自由の体系」との対立において、決着をつけるべき確固たる根拠をつかむことができず、私は不安動揺の疑の状態に陥った。疑を解決しようとして知を求めたが、そこに得られたものは「像の体系」にすぎず、どこにもリアルなもののない夢のまた夢とでもいうべきものにすぎなかった。「自然の体系」のいうように、人が単に自然の一部にすぎないならば、人間の使命について語る意味はなく、又「知の体系」が単に像の世界にすぎぬならば、そこでも人間の使命については語り得ない。私はこれらの立場を脱却せねばならぬ。

(五)

私は真にリアルなものを求める。単に表象の世界、像の世界ではなくして、表象のそとに存する或物、表象が生み出すのでなく、表象が単にそこへ向って進むだけの或物を欲求する。

私の心の奥底に次のような声が響くのが聞える。「汝自身を徒らに静観し、観想するために、或はひたすらな感覚を思いめぐらすために汝は現存しているのではない。さうではなく、行為するために汝は現存しているのだ。汝の行為、そしてただ汝の行為のみが汝の価値を決定する。」

（85頁）

行為するためには、意志から出発すべきで、悟性からではない。意志が不動誠実に、善に向けられてありさへすれば、悟性はひとりでに真を捕えるであろう。意志がゆるがせにされたままで、悟性だけが磨かれるならば、怜悧さは得られても結局は空しさに落ち込むことはさけがたい。意志が不動誠実に、善に向けられてあるためには、良心の声に従わねばなりぬ。良心のみから真理は由来し、良心によってのみ確信は可能である。この確信なくして真実の行為はあり得ない。フィヒテはいう。「私の良心のこの声は、私の生存の一々の特殊な情況の中で、私がこの情況においてなさねばならぬこと、さけねばならぬことを私に命じ、私が注意深くそれを聴こうとさえすれば、私の生のあらゆる出来事を通じて私に同伴し、私が行為しなければならぬ時には、私に示教を拒まない。良心の声は直接に確信を根拠づけ、抗しがたく、私の賛同を拉し去る。私にとって、この声にそむくことは不可能である。この声に従うこと、誠実に無私に、怖れも賢しらもなくこれに従うこと、これが私の唯一の使命であり、これが私の生存の全目的である。――私の生は真理も意味もないむなしい遊戯であることをやめる。（中略）良心のこれらの命令によってのみ、真理と実在性とが私の表象のうちにあらわれる。私は、私の使命を放棄することなしには、これらの命令に対して注意と服従とを拒むことはできない。」（94～95頁）

以上によって、フィヒテは静観と観想とをやめて、良心の声に従って行為するとき、はじめてリアルなものに接し得るとする。ここにいう行為は良心の声に従う行為であることを忘れてはならない。この行為は目的に依存してなされる行為ではない。私は端的に或仕方で（良心の命ずる仕方で）、何といっても行為すべきであるから、行為すべきである。食物が眼前にあるから私は空腹になるのではなくして、私が空腹になるから或物が食物となるのと同じく、私にとって或物が目的であるから、行為するのでなくして、私がそうすべきであるが故に或物が目的となるのである。従ってここでいう行為は、ある目的をめざしてすすむ行為ではなくして、端的に或る仕方でなすべきであるが故になすべしとされる。カントの断言的命令による行為が考えられていることはいうまでもない。フィヒテはこのような行為によってはじめてリアルなものにふれ得るとするがそれは知によって捕えられるものでなく、信によってふれられるものとする。ここにいわば良心の声、行為、信が一体的となることによって真にリアルなものが姿をあらわすとするのである。

この点についてもう少し詳しく説明して見よう。良心は義務を果すように求めると共に、その義務がかかわるところの客体が実在すること

（リアルにあること）を求める。例えば、自己保存の義務は、もしわれわれの体、生理的要求、食欲、食物、飲物などが単に表象にすぎずして、何等現実的なものでないならば、意味をなさぬ。良心が感覚的世界の表象を、現実的なものとするのである。又他の人を理性的な独立な存在として扱えという義務も、もしこの他人が単に私の表象にすぎなくして、私の外にいる現実の人でなかったならば、その意味をなさない。良心を基礎として、私は私の実在性を信じ、それ故に又、私の外にいる他の理性的存在の実在性を信じ、この理性的存在の交互的なかかわりあいの実在性を、又このかかわりあいの媒体となる感覚的世界の実在性いいかえればその現実性を信ずるのである。フィヒテはいう。「あの行為（良心に従ってなされる行為）（筆者註）の要求からして現実的世界の意識は出て来るのであって、その逆に世界の意識から行為の要求が出るのではない。行為の要求こそ最初のものであって、世界の意識が最初ではない。世界の意識は派生的なものである。われわれは認識するから、行為するのではなく、行為すべく定められているから認識するのである。実践的理性はあらゆる理性の根底である。」（99頁）

誰でも、現在の世界の状態が少しでもよくなることを欲しない人はあるまい。しかしそのように欲して行為して見ても、その結果は却って世界の状態がわるくなってしまうことがしばしばある。否そのような場合の方が多いともいえる位である。道徳的心情というものは、このような方面において案外無力であり、却って、このような地上的な世界の目的は、人間行為の単なる機械的機構によって達成され得るのだということを認めざるを得ない。このような事情にあっては、われわれの自由とわれわれの心の内面にある道徳法則とはむなしいものに思われる。それがそうなるべきでないならば、地上的世界の目的が、われわれの全使命であることはできず、又この地上的世界が唯一の現実であることはできない。私はこの世の生活を越えているような目的を持たねばならず、又超地上的な世界が存在せねばならぬ。道徳法則はこのような世界の実在性を要求し、良心はこのような考えを現実化する。私は地上的世界に生きると同時に超地上的世界に生きる。感覚的世界に生きると同時に理性的世界に生きる。超地上的世界といっても、墓の彼方にあるのではない。それは既にここに、われわれの自然のまわりに広がっている。一切のこの世における効果をねらう気持をはなれて、良心の声に従い、義務のために義務をはたす時、われわれは地上的世界の一員であると同時に、超地上的世界の一員なのである。私が理性的法則に服従する決心をするや否や、直ちに私は不死、不易、永遠である。超感性的世界は未来の世界ではなくて現在的である。私は理性的法則に服従する決心によって、永遠性をつかむ。純粋に義務に従う意志は、決して稔りなきものではなく、（この地上的世界においてはそのように見えようとも）永遠の世界において結果を生む原因であることを私は信ずる。感覚的世界にかかってい

る関心を放棄し、きっぱりと完全に地上的なものを断念し、いわばこの世に死することによってのみ、永遠的なものへの信仰は可能である。

私の意識が、自分自身と自分の表象とを超えて進むことができないように、私の意志は自分の範囲即ち心情を超えて働くことはできない。ところで意志だけが、意志を原因にすることができる。有限な意志は自分を超えて働くことはできず、自分を自分自身で、自分の範囲のそとに存する諸結果の原因にすることはできない。従って純粋に義務に従う意志は、永遠の世界においての結果の原因であると信ずるためには、無限なる意志のあることを信じねばならぬ。私の意志が永遠の諸結果を持つような道徳的秩序は、このような無限なる意志においてのみ基礎づけられている。この無限なる意志が私と超感覚的世界との媒介者である。道徳的秩序は個々に異り互に独立した意志が、互に影響しあい、そして、同一の意志、同一の心情によって活気づけられている一つの共同体にまで結合している精神世界ということができる。諸精神の調和はただ無限なる意志において、無限なる意志によってのみ可能である。この精神の調和は、もし諸精神が互に影響しあい互に気持を伝えあって理解しあうことができないならば、可能ではないであろう。このようなことは、われわれがわれわれの感覚、直観、思惟法則に関して一致し、同じ仕方で同一の共通の感覚的世界を表象しなかったら、可能ではないであろう。諸精神の道徳的一致を制約し基礎づける無限意志は、同時にまた諸精神のあらゆる調和の条件でもあり根拠でもある。われわれをして同一の感覚世界を眺めるようにさすのは、この無限意志である。われわれはただこの無限意志において生き、すべてをこの無限意志において、又この無限意志を通じて見かつ認識する。われわれの義務も亦同様である。彼（無限意志）のうちにわれわれはわれわれの根源を持つ。われわれの道徳的心情のうちに、彼は真実に現在し活動している。われわれは有限意志であるから、われわれを如何に上昇させても、われわれをどんなに拡張しても、それによって、われわれが無限意志となることはできぬ。彼とわれわれ有限なものとは、程度のちがいではなくて、類を異にしている。しかし逆に有限的なもの一切は彼のうちにあり、全世界はいわば神の生命の流れである。「私の心は地上的なものへの欲求に対して閉ざされているから、又実際もはや私は移り行くものに愛着しないから、宇宙は私の眼に光明に充ちた形態で現われる。空間を塞ぐにすぎなかった死せる重さある物質塊は消失した。その代りに生と力と行動との永遠の流れ――根源的の、無限者よ、汝の生の永遠の流れが流れ波うちせせらぎを立てる。なぜなら、すべての生は汝の生なのだから。そして宗教的な眼だけが、真実の美の国を洞見する」（151頁）又「汝の生は、有限者が把握し得る姿では、自己を絶対に自己自身に依って形成し顕示する意欲である。この生は――人間の眼には多様に感性化されて――私を貫いて測り知れぬ全自然にまで流れ下る。ここでは、自己自身を創造し形成する物質と

して、私の血管や筋肉を貫き流れ、私のそとでは、樹木、草木、草の中にその充実した生を沈下させる。一の流れをなして滴一滴連りつつ、形成する生は万象の中を、私の眼がこれを追い得る限り、至るところに流れている。そして私を注視する。――宇宙の各点からそれぞれ異った風で――秘密の暗黒の中で私自身の身体を形成する同一の力として。あそこでは、動物における自己形成の運動として、自由に波うち、跳び踊る。」(152頁) このような調子でフィヒテは汎神論的な考えを美文調で謳いあげている。

このように世界のすべてを、神的生命と意志との現れと見るため、世界におけるすべてをよしとする考えとなり、ライプニッツの最良説(Optimismus)を思わせるものがあるばかりではなく、又ライプニッツの弁神論と同様の考え方も出て来る。「生起するものは悉く善であり、絶対に合目的的である。一の世界のみが可能である。徹頭徹尾善なる一の世界が。」(143頁) 「無限なる意志のわれわれへの呼びかけと知らせとは、常に或る一定の義務への促しである。従って――世界において悪と名づけられるもの、即ち自由の悪用の結果さえも、ひとえに無限の意志によってある。この悪用の結果は、それらにとってこの結果が存するとされる、すべての者に対してあるのだが、それはただ、このことによって、このすべての者に義務が課せられるからである。もしわれわれの道徳的陶冶とわれわれ全人類の陶冶との永遠の計画の中に、まさにこれらの義務がわれわれに課せられるべきだということが含まれていないとすれば、諸義務はわれわれに課せられないことになるであろうし、又それによってわれわれに諸義務が課せられることになるもの、即ち悪と呼ばれるものは決して生じなかったであろう。」(143頁)

フィヒテはこのようにして、無限なる意志とそれの世界計画とを信じ、そこから出て来る命令即ち良心の声に従って、義務のために義務を遂行し、単なる世俗的地上的目的だけに捕われず、それを超えて、永遠の国、道徳的秩序の国、の一員となるよう勤めることが、人間の使命であるとするのである。この使命感に生きることは、即ちかの無限なる意志の信仰に生きることであるが、それによって、「すべてわれわれの生は彼の生である。われわれは彼のみ手の中にあり、又何時までもみ手の中にある。誰もわれわれをそこから拉し去ることはできぬ。われわれは永遠である。彼が永遠であるのだから。」(139頁) という神のみ手の中に生きる安心と浄福とが得られるのである。

フィヒテは以上のように説くことによって、彼が「人間の使命」の序文において述べた、「読者を超感性的なものへ力強く拉し去るつもり」は一応達成されたということがきる。

(六)

フィヒテは、「疑」を脱却しようとして、「知」の立場に立とうとしたが、それは結局「像の体系」にすぎず、それによっては、何等リアルのものにふれることができないのを知り、理論的にものを考える立場を去って、実践的立場における行為の立場に立つことによって、リアルなものにふれようとした。そして、人はもともと、根本的には実践的行為において生きているもので、知の立場は、この根本的実践的行為的なものを、反省の世界に映したものに外ならず、いはば派生的なものにすぎないとする。理論理性の根底には実践理性がある。われわれは認識する故に行為するのでなく、行為すべく定められている故に認識するのである。

このような考えによって、行為実践の立場に立つや否や、直ちに問題となるのは、われわれは、それぞれの境遇のなかにあって、何をなすべきかということであるが、フィヒテはそれに対して、良心がそれを示してくれると、安易と思われる程簡単に答える。即ちわれわれは、良心の命ずる声に従って、義務のため義務をつくすとき、永遠的道徳的秩序に入ることができ、最もリアルなものにふれ得るとする。従って、この最もリアルなものは、理論理性の立場から、認識の対象として捕えられるものではなく、実践理性の立場において、義務の遂行を通じて、はじめてそこに入り得る、いわば、われわれの生命の根源なのである。もしそのように見ずして、この最もリアルなものを、われわれの認識の対象として捕えようとすれば、まさに独断的形而上学の立場に堕することとなる故、到底フィヒテの認め得るところではない。

良心の声に従って、義務を遂行するとき、何故、われわれはわれわれの生命の根源にふれ得るかといえば、フィヒテにとっては、良心の声とは、われわれの意志の根底に働く無限意志からの命令であり、義務とはこの意志によってわれわれに課せられたものなのだからである。良心の声に従うこと、即ち義務の遂行は、フィヒテにとっては、永遠的道徳的秩序、超感性的世界、永遠の国、神の国に到る道であり、フィヒテは、良心の声、義務の遂行を通じて、いわば永遠的道徳的秩序に目覚め、神の国に対する眼が開かれたものといえると共に、そのようなことの起り得た根底には、永遠的道徳的秩序、無限意志、超感性的世界に対する信仰があったものと考えられねばならぬ。もしそれがなかったならば、良心の声が神の声とは聞えなかったであろうし、又義務の遂行が、神の国に到る門とはなされなかったであろう。その際、良心の声、義務の遂行から神の国への道をたどったフィヒテが神の国を、永遠的道徳的秩序として信じたのは、当然の成り行きともいえるが、「人間の使命」にあらわれた限り

では、神の国があまりに道徳的な面からだけ見られているという感がないではない。他面からいえば、神の国に到る道は、良心の声に従って、義務を遂行するということだけに限られているような感がないではない。しかも、良心の声に従って義務を遂行する私というものへ、心がつきすぎているように思われる。少し強くいえば、善に執する自己の主張が強いように思われる。真に神の国に到るためには、この自己、この善に執する私も消されねばならぬと思われる。「人間の使命」を考える上では、やむを得なかったこととともいえようが、真に地上の国に死して、神の国に生れるためには、善に執するこの私と、この私の主張とは消されねばならぬ筈である。「人間の使命」の書かれたとき、フィヒテは、まだ年三十八歳の若さであったから、このようなことを望むのは無理かも知れぬが、上に述べたような点に関しては、親鸞の円熟した信仰の如きものによって補われるべきものが多分にあるといわねばならぬ。

「人間の使命」の出された後六年にして公にされた「浄福な生への導き又は宗教論」（一八〇六年）においては、右の点に関して、一層宗教的に深められているといわれるが、今それについて論ずる余裕がないから、次の機会に譲ることにして、次の論文は教示するところが大きいことをお知らせして、この文を閉じることにしたい。

河瀬憲次フィヒテの宗教哲学に於ける神の実在性について

（朝永博士還暦記念哲学論文集所載）

終り（昭四五、九、十）

フィヒテの引用文はメディクス編の著作集、第三巻所載の「人間の使命」により、頁数もその本による。

なお、

宮崎洋三訳

フィヒテ著　人間の使命（岩波文庫）

九鬼周造著

西洋近世哲学史稿　下巻

Kuno Fischer : Fichtes Leben, Werke und Lehre.

(Geschichte der neuern Philosophie.)

フィヒテの「人間の使命」について
を参照した。記して謝意を表する。